

『古事記伝』のヤマトタケル観

— 「神」と「眞心」の二面性 —

河合 一 樹

序

『古事記伝』は、本居宣長（一七三〇—一八〇二）が、七十年の生涯のうちで、約四十年にわたる長い年月を費やして著したもので、その膨大な分量と明細な注釈において、多くの著作の中でも質量ともに抜きん出たものがある。しばしば形容されるように「畢生の大著」と言われるべき所以である。

そして、それは当時読むことさえ困難になっていた『古事記』に対して、初めて本格的な注釈を成し遂げ金字塔を打ち立てたものであって、現在まで続く『古事記』研究の魁として閑却すべからざるものとして読まれ続けている。おそらく、その点についての評価は今後も揺らぐことはないであろう。

しかしながら、他方で、近年の宣長研究においては、『古事記伝』を現代の『古事記』研究と差異を有するものとして捉える傾向が盛んになっている^①。それらは、『古事記伝』は近世という

文脈、あるいは宣長の思索の営みの中に成立したものであって、そこには、単に『古事記』を読解するということを越えた意味があるとということを描し、宣長が『古事記伝』を通して作り上げようとしたものを、その思想の問題として取り上げようとするものである。

そのような研究動向を踏まえた上で、本稿が問題として取りあげたいのは、『古事記』の中巻における景行天皇の箇所の大半を占める有名なヤマトタケル（ヤマトタケ）^②の物語についての宣長の注釈である。これまでの『古事記伝』を捉え直すことを志向する研究においては、『古事記』の上巻すなわち神代の逸話に対する注釈が取り上げられることが圧倒的に多く、本稿が扱う景行記を含めて中巻下巻の人代に対する注釈については、未だに充分な検討が為されていないように思われる^③。もとより、「神の道」を説く宣長において『古事記』上巻が殊更に重要な意味を持つことは言うまでもない。しかしながら、宣長が中巻下巻にも上巻と

異ならぬ情熱を持つて注釈し続けたことは軽視すべからざる事実であつて、その意味を問うことは、『古事記伝』全体、そして宣長の思想全体を考える上で重要性を有するものと予想される。

以上のような観点から、本稿では、宣長がヤマトタケルをどのように捉えているかということ明らかにすることを目標とする。そこで、第一の課題は、当然ながら、『古事記伝』のヤマトタケル観を示す記述からその特徴を検討することであるが、そのことよつて宣長の解釈には著しい傾斜があることがあることが明らかになるものと思われる。それを踏まえて、第二の課題として、そのような傾斜は宣長のヤマトタケル観において許容されるのかどうかということ考察する。すなわち、それはある部分について不当に軽視する解釈の不備であると見なされなければならぬのか、あるいは、宣長の文脈に従う限りにおいては正当なものとして理解されるのかという問題である。

ところで、予め本稿の『古事記伝』への言及の方法について一言しておきたい。先に述べた「ヤマトタケル」の物語は、景行記の中に大半を占め、その各地の平定や道中の死などの様々な逸話が含まれている。また、宣長も景行記には『古事記伝』四十四卷中四卷といふ多くの分量を費やす。しかしながら、それ故にそれを全範囲に渡つて順番に追つていくことは困難である。その為、議論に関わる範囲でのみ取り上げながら、見ていくことにしたい。従つて、『古事記伝』の「ヤマトタケル」に対する捉え方の特徴

が表れていると思われる箇所を指摘しながら、以下段々にその「ヤマトタケル」観を把握していく。

一 建荒之情

『古事記』におけるヤマトタケルのエピソードは、まだ彼が小碓命という名前であつたころ、その兄を「ねぎつる」といふ一件から始まる。すなわち、宣長の解釈に従つて文脈を説明すれば、ヤマトタケルの兄が天皇の大御食に出席しなかつたので、天皇がヤマトタケルに「ねぎ教え覺せ（ねんごろに教え覺せ）」と言つたところ、ヤマトタケルは兄の手を挽ぎ棄てた。そして、その為五日経つても兄は姿を現さず、天皇が不審に思つてまた教えてなにかと尋ねたところ、ヤマトタケルは「既にねぎつ」と答えたというものである⁽⁴⁾。

この事件の後、景行天皇はヤマトタケルの性情を「建荒之情」と評して「惶」み、ヤマトタケルをクマン討伐へと向かわせる。まず、その箇所における宣長の注釈を見ておこう。

○建荒とは、先に天皇の詔には、たゞ泥疑教覺と詔へるのみなるに、ゆくりなく右の件の如く、行ひ賜へるは、唯に建く坐のみに非ず、いと／＼荒き御所爲なるを云、⁽⁵⁾

○惶とは、つらく／＼に思にたゞ建とのみはあらで、荒と云、又所為行などはあらで、情と云るなど、此度の御所為に因て、其御心の荒きほどを、所知看て、今以後も、なほ如何なる荒き行をか為賜はむと、恐れ惶み賜ふなり、されば熊曾を征に遣すは、かたへは、京に居賜ふことを畏み賜ひて御所を遠ぞけ賜はむの、大御心もや坐けむ、さて、西方の政、竟て復命し給ひしに、又頗て東方言向に遣せりしも、此故とこそ聞ゆれ、^⑥

「建荒」も「惶」も『古事記』本文中に登場する語であるので当然のことかもしれないが、ここで、宣長は明確に「ヤマトタケル」を「建」であると同時に「荒」であるものとして捉え、その「荒」は天皇が「恐れ惶み」自らの下から遠ざけ西や東に向かわせるほどのものであったとしている。わざわざ「荒」を「ヤマトタケル」が行った行為だけでなく、その「御心の荒きほど」であると注釈するのは、その周到さを窺わせるものである。しかしながら、その解釈は内容から見てもあるいは分量から見ても、淡泊であると言わざるを得ない。そこには、後に見る箇所のおいづつかを示すような明細な記述や文脈を超えて自らの意見を述べるようなこだわりが備わってはいない。この箇所の注釈は、『古事記』に出てきた言葉を敷衍し説明したものに過ぎないといつてよいだろう。

ところで、現在ではこの段に示されるような、暴力的なイメージは、ヤマトタケルの性格の重要な一面を形作るものとして人口に膾炙しているように思われるが、そうした見方に慣れた目には、このような宣長の解釈の簡潔さは若干の違和感を覚えさせるものとして映る。その違和感を頭の片隅に置きながら、以下に考察を進めて行きたい。

二 クマノ討伐について

ヤマトタケルを評した「建荒」という言葉に対する宣長の注釈が簡潔なものであったことを見たが、次に指摘したいのは、宣長がその内の「建」という要素については繰り返し言及するものの、「荒」ということについては一切言及することがないということである。

宣長の注釈では、「荒」という言葉は、先程の箇所に続くクマノ討伐の話^⑦においても、既にその姿を現すことはない。しかし他方では、そこにおいて「ヤマトタケル」は、クマノの兄弟を惨殺といつていような仕方^⑧で殺す。特に、弟建を殺すときに「熟瓜の如振り折き」といった表現がなされ、それは今日ではヤマトタケルの「荒」の表れと見なされているように思われる。例えば、西郷信綱『古事記注釈』は、ヤマトタケルの異常な「建く荒き情」が「熟瓜の如振り折き」という句に一挙に集約されている

と述べている⁽⁹⁾。しかしながら、それに対して、宣長の注釈は次のようになっている。

凡て振とは、物の動揚することに云て、此はかの尻より、小腹刺通し給へる刀を、やがてはたらかして上さまへ裂揚げ給ふを云なり、さて如熟瓜と云るは、熊曾を斬裂給へることの、いと容易きを、譬へて、此王のいみしく勇猛く坐ほどを躰せるなり、熟瓜は、甚柔脆にして、裂易き物なればなり、⁽¹⁰⁾

ここでは、ヤマトタケルに対する「荒」という評価は消失し、ただ「勇猛く坐」というように評価している。「熟瓜の如」という表現はただ容易に切り裂いたというヤマトタケルの強さを示すものとして解されている。

もとより、兄を「ねぎつる」という身内に対する暴力と倒すべき敵としてのクマゾに対する暴力とは、必ずしも同じ平面上に存するものではなく、今日の解釈のフィルターを通すのでなければ、宣長が両者を区別して解釈することは不当なこととは言えないだろう。しかしながら、宣長が「荒」ということをあえてここで繰り返して解釈しようとしないうことは、少なくとも、宣長が「荒」という概念に注目し後の箇所を理解するためのキーワードとして用いるほど、重く見てはいないということを示唆すると

言つてよい。

三 眞心

さて、以上のクマゾ討伐の箇所までについては、現在において「荒」との関係が指摘される箇所である為、また、具体的なエピソードに対する注釈を一つは確認しておきたかった為に、ヤマトタケルの話の最初から順を追って見て来たが、序で一言したように以下においては、順番に話を追っていくのではなく、ヤマトタケル観の特徴を示すと思われる箇所に注目していきたい。宣長のヤマトタケル観を総括するような記述は二つ認めることが出来るが、その第一は、次のようなものである。

さばかり武勇く坐皇子の、如此申し給へる御心のほどを思度り奉るに、いと／＼悲哀しとも悲哀き御語にざりける、然れども、大御父天皇の天命に違ひ賜ふ事なく、誤り賜ふ事なく、いさ／＼かも勇氣の撓み給ふこと無くして、成功竟給へるは、又いと／＼有難く貴からずや、〔此後しも、いさ／＼かも勇氣は撓み給はず、成功をへて、大御父天皇の天命を、違へ賜はぬばかりの勇き正しき御心ながらも、如此恨み奉るべき事をば、恨み、悲むべき事をば悲み泣賜ふ、是ぞ人の眞心にはありける、此若漢人ならば、かばかりの人は、心の裏には甚

く恨み悲みながらも、其はつゝみ隠して、其色を見せず、かゝる時も、たゞ例の言痛きこと武勇きことをのみ云てぞあらまし、此を以て戎人のうわべをかざり偽と、皇國の古人の眞心なるとを、萬の事にも思ひわたしてさとるべし、」(11)

これは、ヤマトタケルが征西から帰つて来た途端に、景行天皇に再び東へと向かうように言われ、父である天皇は私に死ねとお思いなのかと嘆く場面(12)の注釈である。当該箇所につけられた注釈ではあるが、その後も含めた評価にもなっているものと思われる。

そして、ここで捉えられているのは第一に「勇氣」「勇き正しき御心」という性格であり、第二にそれにも拘わらず死ねとお思いなのかと「恨み奉るべき事をば、恨み、悲むべき事をば悲み泣賜ふ」姿が「眞心」という宣長思想の重要概念によつて捉えられる。これは、各地に遠征した強い英雄としてのヤマトタケルと後半部に顕著な天皇に疎外され旅の途中に死んだ悲劇の主人公としてのヤマトタケルの二重性を捉えたものだろう。

しかしながら、そこにおいては「荒」ということは、全く取りあげられていない。強いと同時に悲しむべきことを悲しむという二面性については捉えられていても、強いと同時に天皇が「惶み速さけるほどの暴力的な性格は眼中の外に置かれているのである。

四 「神」としてのヤマトタケル

宣長のヤマトタケル観の全体を表現するような記述の二つ目は、ヤマトタケルの死後その後たちが歌つた歌が、その後も天皇の大御葬で用いられることになったということ(13)への注釈である。その理由を考察して次のように言っている。

さて御々世々の天皇の大御葬に、此御歌等をしも唱へる所以は、まづ此倭建命は、仲哀天皇の大御考尊に坐々て、萬を天皇に准奉ることはさるものにて、神とも神と坐々て、世に比なき大功を立賜ひて、終に白鳥と化て飛去坐ぬるなど、都て尋常ならざるうへに、壯の御年にして、旅行にしも崩坐ぬるなど、其悲哀さも又尋常ならず、此御歌どもはまた、殊に優れて悲哀さの甚深きなど、彼此を以てなるべし、(14)

これは、既に崩つたヤマトタケルの生涯の物語の全体を包括するものと言いうると思われるが、ここにおいて宣長がヤマトタケルの物語から捉えるのは、その征伐における比類なき「強さ」を持ちながら旅の上に嘆きながら死んでいくという「悲哀さ」であつて、それによつて示されるヤマトタケル像の特徴は、先程と同

じく「勇氣」と「眞心」という二側面である。そこでは、やはり、「荒」という要素は取り上げられていない。

以上の二つのヤマトタケルに対する総合的な記述を見る限りにおいて、宣長のヤマトタケル観は、「荒」という言葉が登場する前半部よりも、東征の開始以降天皇に阻害される自らの運命を嘆きつつ、やがて旅の途上に病に倒れる後半部に重きをおいているということが出来る。しかも、最初に見た「建荒」の注釈において明確に捉えているにも拘わらず、その「荒」という性格が、ヤマトタケル全体を評価するときに、重点が置かれなるところか全く姿を現さないと、ことに鑑みるならば、その傾斜は極めて強いものであるというべきである。

さて、先程の「眞心」の箇所においてだけからでも、十分に指摘できることであるが、さらにここにおいて、宣長がヤマトタケルを「神とも神と坐々」と指摘するのを見ると、そこにはヤマトタケルに対する非常に高い関心と評価とが存していることは論を俟たない。それにも拘わらず、何故「荒」といった明確に為されているヤマトタケルの一面の評価を全く無視することが出来る、そのような解釈の傾斜が宣長の理解において許容されるのだろうか。あるいは、この点は宣長の解釈の不備として指摘されねばならないことなのだろうか。

五 「神」と「眞心」の二面性

以上においては、宣長のヤマトタケル観について段々に見て、物語の最初に登場する「荒」ということを取り上げず、むしろ後半部における悲劇的英雄としての在り方に傾いた解釈をしているということを指摘したが、最後に、そうした解釈の在り方を問題として、何故それが可能であるのか、そしてそもそも宣長の枠組みにおいてそれは可能であるのか、ということについて考えた。

その為には、まず、宣長がヤマトタケルを評して「神」として捉え、人の「眞心」の在り方を代表するものとして捉えることに於ける「神」や「眞心」といったことと、「荒」との関係が如何なるものであるかということを見てみよう。まずは、「神」について、宣長がその考えを披歴する有名な一文を挙げれば次のようなものである。

さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始め、其を祀る社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり、【すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪きもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば、神とは云なり、(15)

この箇所の記事はさらに長く明細に続いていくが、盛んに取り上げられる箇所であり、また、ここにおいて既に注目すべき特徴が表れていると思われる為、わずかに一部を引用するだけに留めよう。宣長の「神」観の特徴としてここから指摘できるのは、第一には、『古事記』において活躍するような有名な神だけではなく、様々なものがその「可畏」さにおいて「神」として認められることであり、人もその中には含まれるということである。先程見たように、宣長はヤマトタケルの物語の「悲哀さ」を「可畏」きものとして捉え、「神」である根拠にしており、またそれは人の「真心」と連関していたが、そうした解釈の依って立つ所である。そして、第二には、「可畏」さは「侮れたるのみを云に非ず」として、「悪きもの奇なるもの」も「神」の内に包含する点である。このことについては、宣長の「真心」についての主張と合わせて考えよう。次に挙げるのは、『玉勝間』の「學問して道をしる事」と題される条の一文である。

そもく道は、もと學問をして知ることにはあらず、生まれながらの真心マコトココロなるぞ、道にはありける、真心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ⁽¹⁶⁾

これも、有名な文章であるため、あまり明細に考察するには及

ばないだろう。また、その意味を考え尽くすことは、困難でもあり、本稿の範疇に属することではない。ここでは、本稿との関心からのみ取り扱うことにしよう。第一には、「真心」が宣長の主張する道の中核を成しているということが指摘出来る。先程のヤマトタケルの箇所で、「漢人」の在り方と対比されながら「真心」が殊更に強調されていた所以である。そして、第二に注目されるべきことは、「真心」についても、「よくもあしくも」というように規定されているという点である。

以上の二つの引用において、宣長がヤマトタケルに対する解釈において強調するところの、それが「神」として理解されるということと、また人の「真心」を象徴するものとして捉えられるということに關して、それぞれの定義というべき言及を取り上げた。そこに共通して見出されるのは、それらが共に善悪の両者を含みこむものとして考えられているということである。このことは宣長が、自らの思想を儒学などの「漢意」的なものに対して定立するときの重要点ともなるのであるが、ここでは、それらが善悪を合わせたものであるということと宣長のヤマトタケル解釈との關係についてが問題である。

宣長のヤマトタケル解釈に対する疑問点は、何故「荒」ということがほとんど閑却されてしまうのかということであった。ところで、兄を「ねぎつる」という「荒」と評価される行為は、善悪という視点を持ち込めば、「悪」に属するものであると言えるだ

らう。さらには、宣長の言説に鑑みれば、「荒き」ということを他の箇所では「荒ふる」と解釈し⁽¹⁷⁾、また、「悪」をしばしば「あらふる」と読む⁽¹⁸⁾といったことから、そのような意味での「悪」として解釈されうる可能性すらある。

そのことを踏まえて考えるならば、宣長が「神」や「眞心」について善悪を包含するものとして捉えるとき、そこにおいてヤマトタケルが「荒」を含むものであるということは、二面性としては理解されない。「神」や「眞心」といった概念は、「荒」と何ら齟齬をきたすものではなく、それ故に、ヤマトタケルの異なった性質として殊更に浮かび上がって来るものではないである。従って、宣長が「荒」についてほとんど重きを置かず、後半部に示される性格を強調することは、少なくとも宣長のヤマトタケル解釈の枠組みにおいては、決して不可解なことではない。

結

宣長のヤマトタケル観についての本稿の論旨をあらためて纏めれば、次のようになる。第一に宣長はヤマトタケルを「神」であるとして重視するが、そこにおいて捉えられるのは、極めて強いつと同時に「悲むべきことを悲む」ような「眞心」を有するものとしての二面性であり、「荒」ということが取り上げられないということである。そして、第二には、そうした解釈が何故可能で

あるのかと言えば、「神」や「眞心」ということが善悪の両者を含むものとして考えられていたことを顧慮するならば、宣長の文脈においては、「荒」ということは、異なった側面としては浮かび上がって来ない為であると結論した。

最後に、本稿が扱ったのが、あくまで『古事記伝』におけるヤマトタケル観であつて、『古事記伝』における景行記の意義といったようなことではないということについて付け加えて言及しておきたい。すなわち、「荒」が重視されないということがヤマトタケルの解釈の上においては齟齬を来さないとしても、『古事記伝』全体を見渡すならば、必ずしも事情は同一ではないと思われるのである。

もとより、先に見た「神」や「眞心」において、それらが善悪を共に含むものであるという主張において、「悪」は重要な要素を成していたが、さらに東より子が明細に指摘するように「吉善事凶悪事⁽¹⁹⁾つき／＼に移り⁽²⁰⁾もてゆく理⁽²¹⁾」といった宣長のテーゼは、『古事記伝』の通奏低音を成しており、神代の様々な話においては、それとの連関において、善悪が入り混じりながら天皇を中心とした古代日本の在り方が成立していくといった仕方⁽²²⁾で宣長は『古事記』を理解する。そうした態度に鑑みるならば、その文脈に景行記がどのように位置付けられるかという問題が存している。

そのような角度から見たとき、ヤマトタケル像の解釈では問題

とならなかつた「荒」には何か別の仕方の意味を読み取ることが出来るのかという問いが生じる。もし、出来るならば、当然それはどのようなことかということが問題となる。そして、また出来ないとするならば、上巻の注釈においてあれほど重視され繰り返されていた「古善事凶悪事つき／＼移りもてゆく理」が、何故ここに至ってそれを読み込むことが可能であると思われる箇所において登場しなくなるのかということが、極めて重要な問題として立ち現われてくる。それは、『古事記伝』の全体の構造に關わることである。いづれにしても、景行記の重要性は未だに尽くされていけないというべきであろう。

しかしながら、それは本稿の主題の範疇を超えたことである。宣長のヤマトタケル観の特徴を把握し、それが宣長のヤマトタケル解釈の文脈においては整合的であるということということが本稿の結論である。

※宣長からの引用に際しては、筑摩版全集を用い、書名の後に巻数と頁数を(巻数・ページ数)の形で示した。なお、文意に影響のない範囲で、漢字を改めたものもある。また、『古事記』本文に言及する際に参照箇所を示したが、現代のテキストを用いず、『古事記伝』の当該箇所を示した。

註

- (1) 例えば、子安宣邦『本居宣長』(岩波新書、一九九二)や、東より子『宣長神学の構造』(ベリカン社、一九九九年)、金沢英之『宣長と『三考』』(笠間書院、二〇〇五)、神野志隆光『本居宣長『古事記伝を読む』Ⅰ～Ⅳ』(講談社選書メチエ、二〇一〇年、Ⅱ二〇一年、Ⅲ二〇二年、Ⅳ二〇一四年)、山下久夫・斎藤英喜編『越境する古事記伝』(森話社、二〇一二年)における諸論文などが挙げられる。
- (2) 宣長は、「倭建」を「ヤマトタケ」と読んでおり、また、現在でも読み方についての議論が中村啓信「ヤマトタケと読むべき論」(中村啓信『古事記の本性』、おうふう、二〇〇〇年所収)などにおいてあるが、本稿ではその点について立ち入らないので、本文中では今日において一般的な「ヤマトタケル」という呼称を用いることにする。
- (3) ただし、これは先行研究が中下巻を軽視していたということではない。まず、上巻についての研究が行われ、中下巻が残された課題であるというべきである。また、神野志前掲書は、『古事記伝』の全巻に渡る研究であつて、当然中下巻についても扱っており、決して中下巻を扱う研究が皆無である訳ではないということも付け加えておきたい。
- (4) 『古事記伝』二十七之巻、十一・一八九。この箇所の宣長の解釈の特徴をあげれば、第一に現在では、この兄は、大確

命であり、この箇所の前にある天皇が召し上げた女を奪つたという話とのつながりで、その気まづさから来なかつたとするのが一般的であるように思われるが、宣長は、前後の繋がり認めず、兄が楠角別王である可能性も考えており、そうした説明に与しない。また第二に、現在では、「ねぎつる」に対して兄を手足を挽ぎ取つて殺し、その遺体を捨てたとする解釈が一般的である。これらの点については、詳しくは、神野志前掲書(Ⅲ)一四六～一五〇頁参照。

- (5) 同書、十一・一九四。
(6) 同書、十一・一九四、一九五。
(7) ちなみに、宣長は景行天皇が「建荒」という箇所からクマン討伐を終えるまでを分けて一つの段にしている。それにも拘わらず、「荒」という語は繰り返されないのである。
(8) 同書、十一・一九四。
(9) 西郷信綱、『古事記注釈』六卷、ちくま学芸文庫、二〇〇六、五三～五五頁参照。
(10) 『古事記伝』二十七之卷、十一・二〇五。
(11) 同書、十一・二二九。
(12) 同書、十一・二二三、二二四。
(13) 『古事記伝』二十九之卷、十一・二九四。
(14) 同書、十一・三〇四。
(15) 『古事記伝』三之卷、九・二二五。

(17)(16) 『玉勝間』一の卷、一・四七。

海幸山幸の段の注釈において、「荒心」という言葉に関して、「〇起(荒心)これ彼須々鉤宇流鉤と云る、二の詔言の驗に當れり、【弟命の御威徳に勝がたきことを、得悟らで、なおかく須々美荒ぶるは、癡駭心なれば、宇流てふ驗をも兼たり、】『古事記伝』十七之卷、十・二七〇」とあり、ヤマトタケルに關する「建荒之情」という言葉に關しても「荒ぶる」ということとの關係が存していることは明白であると思われる。

(18) 景行記中に一例を求めれば、「〇悪人は、麻都漏波奴比登と訓べし、下なるも同じ、【悪神をば、アラフルカミと訓つれども、あらぶる人と云る例は見あたらず、】『古事記伝』二十八之卷、十一・二七〇」というものがある。

(20)(19) 『古事記伝』七之卷、九・二九四。
東前掲書、第五章第六章参照。

(か) かわい・かずき 筑波大学大学院
人文社会科学研究科